

第1章 津和野町の概要

第1節 位置及び交通条件

津和野町は島根県の最西端に位置し、町域の面積は307.09 km²で、北及び東は益田市、南は吉賀町、北西は山口県萩市、南西は山口市にそれぞれ接している。

道路による主要都市との距離は、島根県の県庁所在地・松江市から約190 km、広島市から約130 km、山口市から約60 kmである。

広域的な交通条件をみると、国道9号（京都市～山口市）及び187号（津和野町～岩国市）、主要地方道津和野田万川線、主要地方道萩津和野線などが町内を通過している。

また、JR山口線が通り、北から東青原、青原、日原、青野山、津和野の各駅がある。さらに、南の吉賀町にある中国自動車道・六日市ICが約30km、北の益田市にある萩・石見空港が約25 kmの距離に立地している。



図 1-1 津和野町の位置

第2節 自然環境

1 地形

津和野町は、中国山地の北面に位置し、山地部を中心とした中で、高津川^{たかつがわ}*1やその支流に沿って数多くの小規模な平地が形づくられ、典型的な中山間地域となっている。

町域の南東側には、安蔵寺山^{あぞうじやま} (1,263m)をはじめ、燕岳^{つばくろだけ} (1,079m)、香仙原^{こうせんばら} (1,056m)とといった千メートル級の山々がそびえ、一部高津川^{たかつがわ}などでとぎれるものの、そこから緩やかに下る形で、町域の南・東側を中心に稜線が連なる。また、町域の南西部には青野山^{あおのやま}火山群の山々が点在しており、その主峰である青野山 (908m) はランドマークにもなっている。

地質的な特徴としては、本町は近畿から中国地方にかけて帯状に広がる「舞鶴帯^{まいづるたい}*2」の最西端に位置し、日本最古となる25億年前の「花崗片麻岩」が見つかっている。

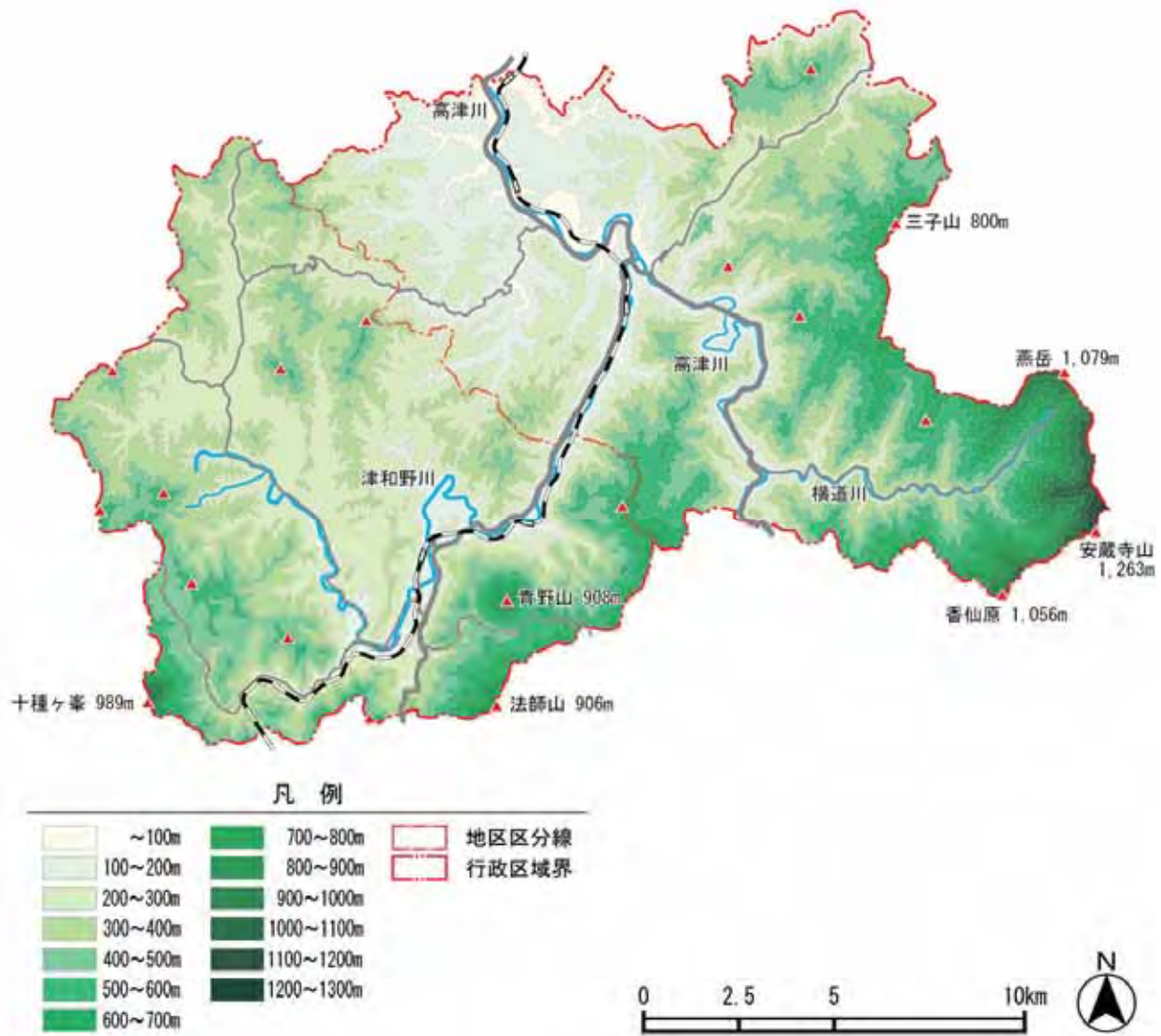


図 1-2 津和野町の地形

※1 高津川

島根県西部を流れる一級河川高津川水系の河川で、全長約 81 km。一級河川で唯一ダムがない（砂防ダムを除く）。日本有数の水質を誇り、平成 18 年(2006)、平成 19 年(2007)、平成 22 年(2010)～平成 25 年(2023)、及び令和元年(2019)に一級河川の水質日本一（国土交通省水質調査「全国一級河川の水質現況の公表」）となる。

※2 舞鶴帯

日本の地体構造区分上、西南日本内帯における区分名の一つ。京都府北部の舞鶴市付近から西南西に延びて津和野町付近に至る幅約 20 km、長さ約 200 kmの地帯。津和野町では、25 億年前に形成された花崗岩が、18.3 億年前に変成作用で花崗片麻岩となった岩石が発見された。

2 植生

津和野町の植生は、全体的に「ヤブツバキクラス域代償植生」と「植林地・耕作地植生」が混在した状況が広がっている。

また、安蔵寺山^{あぞうじやま}や青野山^{あおのやま}の周辺などでは「ブナクラス域代償植生」がみられる。

この他、「ヤブツバキクラス域自然植生」が一部でみられる。

植生についての説明

○植生区分とクラス域

日本の植生は、自然植生の構成種の名をとって、高山帯域(高山草原とハイマツ帯)、コケモモトウヒクラス域(亜高山針葉樹林域)、ブナクラス域(落葉広葉樹林域)、ヤブツバキクラス域(常緑広葉樹林域)の各クラス域に大別されている。この「クラス域」とは、広域に分布し景観を特徴づけている自然植生によって植物社会学的に定義されたもので、主要なクラスの生育域のことを指している。

ブナクラス域…日本の落葉広葉樹林域は、群落体系上の最上級単位であるブナクラスの名をとり、ブナクラス域と呼ばれている。ブナクラス域は東北北部から北海道では低地からみられる。南にいくほど高度は上がり、中部日本で標高1500～1600mから600～700mの間に発達し、九州の霧島で700mから1000mとなる。

ヤブツバキクラス域…日本の常緑広葉樹林域は、体系上の最上級単位であるヤブツバキクラスの名をとって、ヤブツバキクラス域と呼ばれている。ヤブツバキクラス域は関東以西の標高700～800m以下で発達し、北にいくほど高度を下げ、東北地方北部では海岸寄りに北上している。逆に南にいくほど高度は上がり、九州の霧島では1000mが上限となる。ヤブツバキクラス域は、本州、四国、九州までの地域と、常緑植物の豊富な奄美大島以南の琉球及び小笠原の亜熱帯域に大きく二分される。

○自然植生と代償植生

現存植生の多くは、本来その土地に生育していた自然植生(原生林など)が人間活動の影響によって置き換えられた代償植生(二次林など)であり、現存植生図の作成にあたっては、植生区分はこれらクラス域の植生について自然植生と代償植生とに区分されている。さらに、河辺・湿原・塩沼地・砂丘などの環境条件の厳しい特殊な立地に生育する植生のように、クラス域を越えて分布する植生(主として自然草原)については、地形や地質的要因で持続する自然植生であるため、特殊立地の自然植生として独立して区分させている。

※出典：環境省自然環境局生物多様性センターHP



凡 例

- ブナクラス域自然植生
- ブナクラス域代償植生
- ヤブツバキクラス域自然植生
- ヤブツバキクラス域代償植生
- 河辺・湿原・塩沼地・砂丘植生
- 植林地・耕作地植生
- その他
- 地区区分線
- 行政区境界



出典：1/25,000 植生図・GIS データ(環境省自然環境局生物多様性センター)

注：1/25,000 植生図・GIS データ(環境省自然環境局生物多様性センター)を使用し、作成・加工したものである。

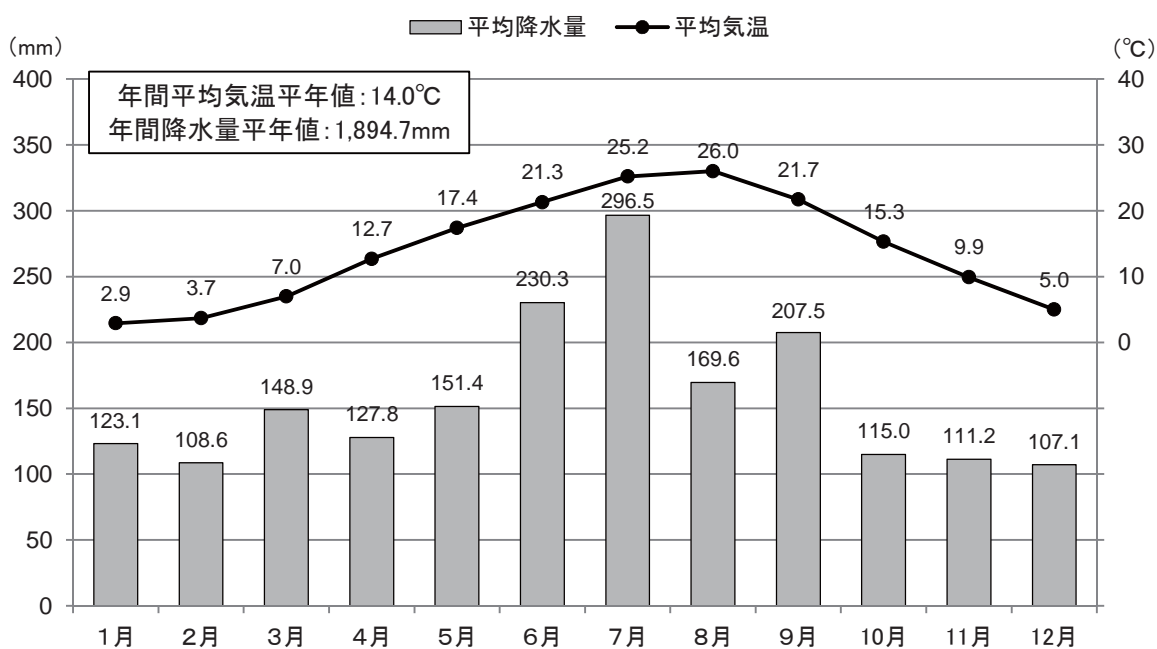
図 1-3 津和野町の植生区分

3 気象

津和野町の気温及び年間降水量は、石見地方の日本海沿岸地域と中国山地の稜線部地域との中間的な数値を示し、日本海沿岸地域よりも気温が低く、年間降水量が多い。特に冬期には中国山地の稜線部地域ほどではないものの降雪があり、晴天の日が限定されている。また、津和野町をはじめ高津川流域の内陸部では、昼夜の温度差が大きく、たびたび朝霧が発生する。

年間平均降水量の平年値は約 1,895 mm (1981～2010 年の平均) であり、瀬戸内や太平洋側と比べて多い。

気温は、沿岸部と中国山地の稜線（県境）付近などとの中間的な値になっており、年間平均気温の平年値は 14.0℃ (1981～2010 年の平均) となっている。



資料：気象庁・気象データ（津和野） 1981～2010年平均

図 1-4 津和野町の気象

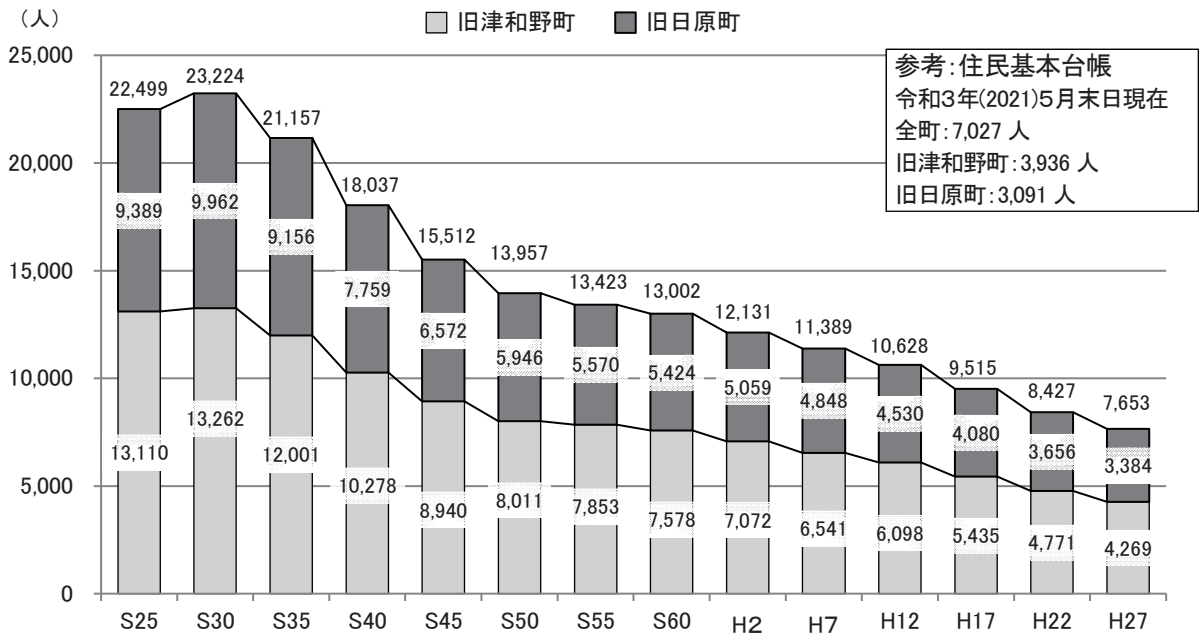
第3節 社会環境

1 人口

津和野町の人口は令和3年(2021)5月末現在で7,027人、高齢化率は48.9%となっている(住民基本台帳)。

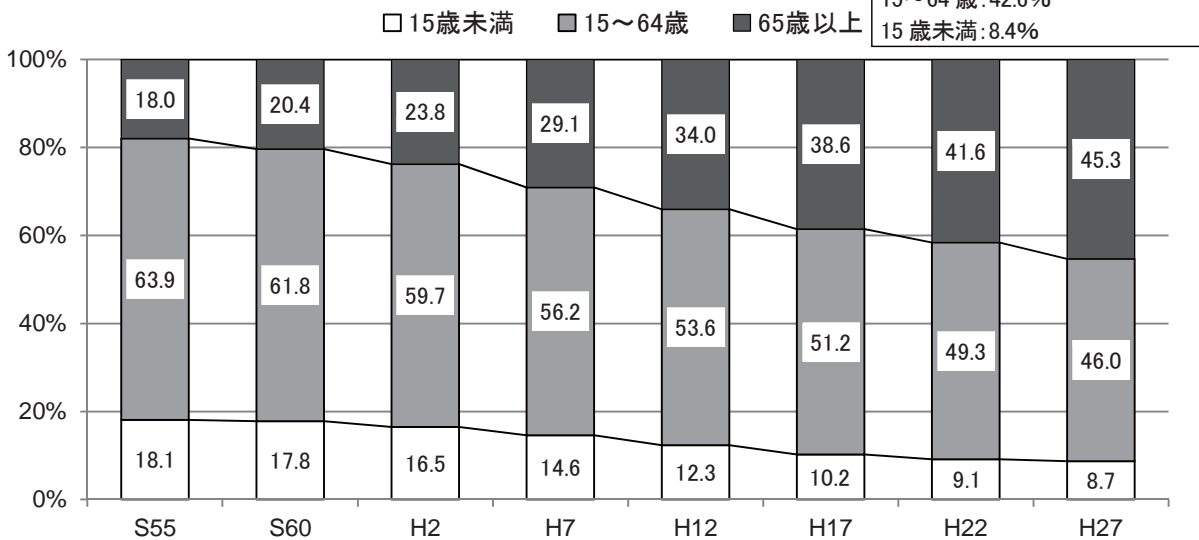
人口の推移を国勢調査で見ると、減少傾向が続いており、ピークの昭和30年(1955)と比べると平成27年は15,600人近く減少(23,224人→7,653人)している。

年齢3区分別で見ると、少子高齢化が進み、昭和60年(1985)には65歳以上の割合が15歳未満の割合を逆転し、平成27年(2015)では高齢化率(65歳以上)が45.3%と高くなっている。また、生産年齢人口である15歳～64歳の割合は、平成22年(2010)には5割を切っている。



※人口は、旧津和野町、旧日原町を合計したものである。

図 1-5 人口推移



資料: 国勢調査

※人口は、旧津和野町、旧日原町を合計したものである。

図 1-6 年齢3区分別人口割合の推移

国立社会保障・人口問題研究所（社人研／厚生労働省所管）から示された第1期（2013年推計）と第2期（2018年推計）の「日本の地域別推計」に準拠した推計人口（内閣府提示）をみると、津和野町においては第1期に比べ第2期では人口減少にやや歯止めがかかった状況となっている。

しかし、減少傾向が続くことに違いはなく、本計画の計画期間の最終時点となる令和11年度末（2029年度末）の第2期の推計人口は5,403人となり、平成27年（2015）よりも2,250人減少することになる。さらに、令和22年（2040）には4千人台、令和32年（2050）には3千人台、令和42年（2060）には2千人台となり、引き続き顕著な減少傾向が続くと予測されている。

こうした推計を踏まえ、「まち・ひと・しごと創生津和野町人口ビジョン（改訂版）」では、重点課題を掲げてそれに取り組むことにより、令和42年（2060）の目標人口を4,816人としている。

※「まち・ひと・しごと創生津和野町人口ビジョン（改訂版）」令和2年（2020）3月をもとに作成

表 1-1 人口推計と目標人口

区分	平成27年 2015年	推計値					
		2020年	2025年	2030年	2040年	2050年	2060年
第1期 社人研推計人口 (2013年推計)	(推計)7,502	6,686	5,911	5,194	3,957	2,957	2,222
第2期 社人研推計人口 (2018年推計)	(実績)7,653	6,844	6,093	5,403	4,208	3,245	2,568
本町の目標人口	(推計)7,524	6,803	6,216	5,749	5,089	4,754	4,816

出典：「まち・ひと・しごと創生津和野町人口ビジョン（改訂版）」2020年3月

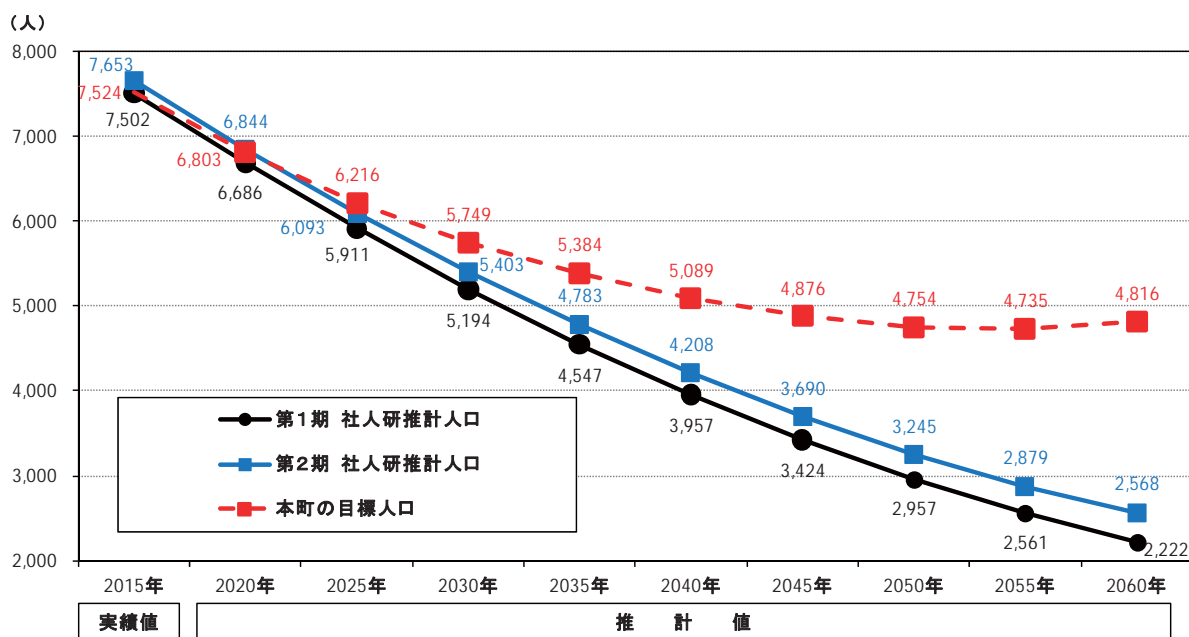


図 1-7 津和野町の推計人口と目標人口

2 産業別人口構成

津和野町の産業別人口構成は、平成 27 年（2015）国勢調査時点で、総人口 7,653 人に対して就業人口 3,873 人であり、その内訳は第 1 次産業が 714 人（18.4%）、第 2 次産業が 686 人（17.7%）、第 3 次産業が 2,451 人（63.3%）となっている。第 1 次産業の中では農業の比率が高く、第 2 次産業の中では建設業と製造業がおおよそ半数の割合を占めている。全体としては、観光関連を含めた第 3 次産業が就業人口の過半を占めている。

表 1-2 産業別人口構成

			(単位:人)
総人口			7,653
就業人口			3,873
内訳	第 1 次産業	農業	643
		林業	71
		漁業	—
		計（）内は構成率	714(18.4)
	第 2 次産業	鉱業	1
		建設業	323
		製造業	362
		計（）内は構成率	686(17.7)
	第 3 次産業（）内は構成率		2,451(63.3)
	分類不能		22

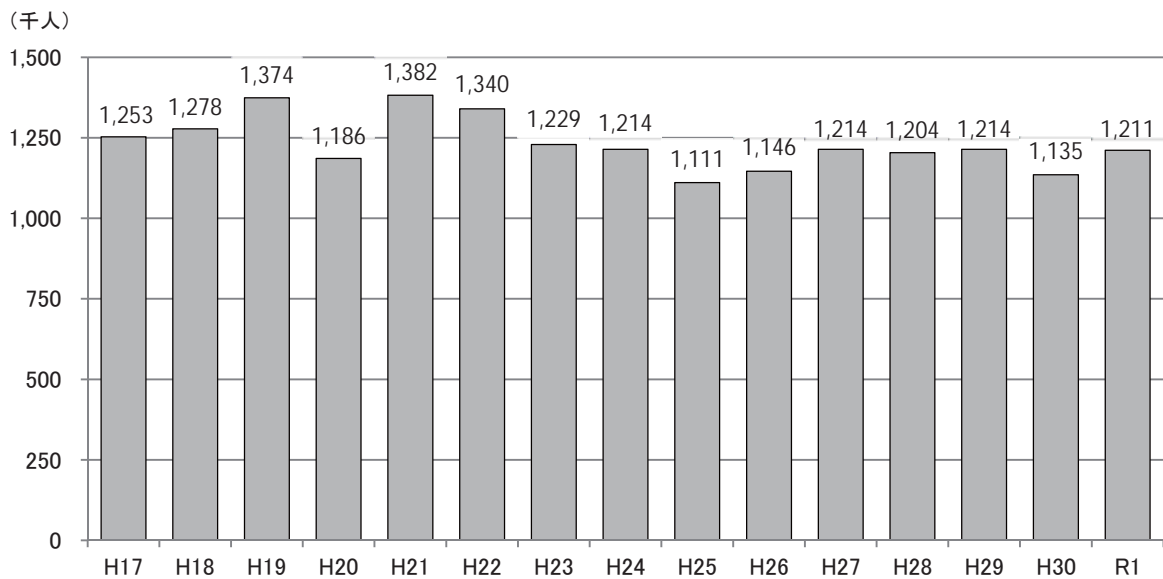
資料：平成 27 年国勢調査結果

3 入込観光客

津和野町の入込観光客数は、令和元年(2019)において約121万人となっている。

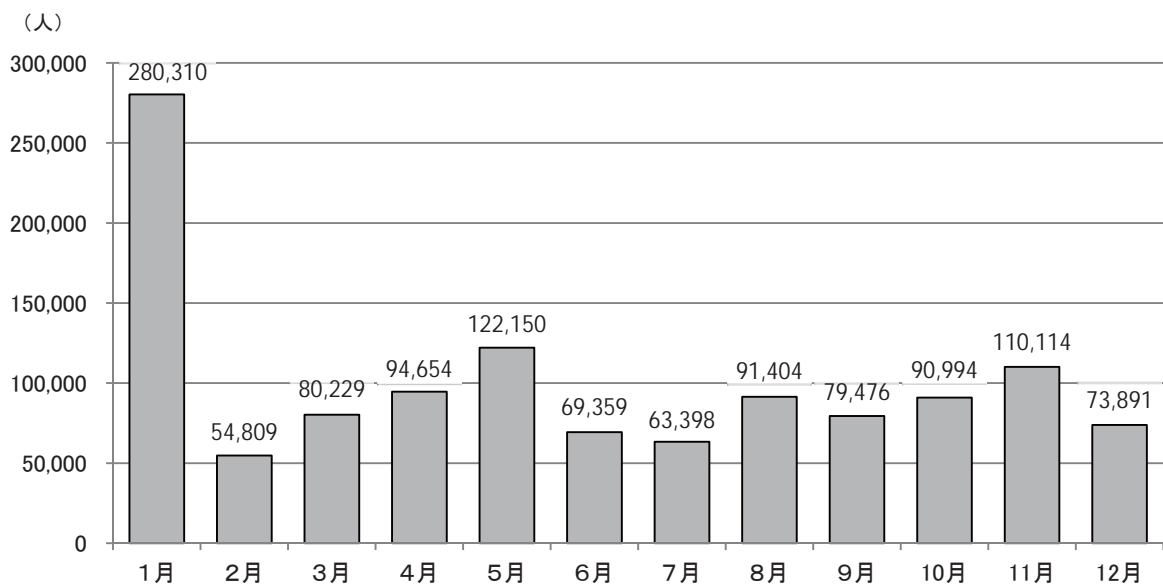
最近15年間(平成17年以降)で見ると、平成21年(2009)の約138万人をピークにその後減少し、平成27年(2015)以降は120万人前後で推移している。

令和元年(2019)の月別の入込観光客数をみると、1月は「太鼓谷稲成神社」の初詣の来訪者が多数いることから約28万人で最も多くなっている。その他では5月、8月、10月、11月に10万人前後となっている。



資料：島根県観光動態調査結果

図1-8 津和野町の入込観光客数の推移



資料：島根県観光動態調査結果

図1-9 津和野町の月別入込観光客数(令和元年)

令和元年(2019)の観光地点別入込客延べ数をみると、太鼓谷稲成神社が約 60 万人で最も多く、次いで「道の駅津和野温泉なごみの里」が約 24 万人、「道の駅シルクウェイにちはら」が約 23 万人となっており、これら 3 箇所で 100 万人を超えている。

各観光地点の入込客延べ数の平成 21 年(2009)からの推移をみると、一部を除き、減少又は横ばい状態となっている。

なお、令和元年(2019)4月には、保存修理を終えた藩校養老館^{ようろうかん}を公開・活用しており、観光施設としての役割も担っている。

表 1-3 観光地点別観光入込客延べ数

観光地・施設	平成 21 年	平成 26 年	平成 30 年	令和元年 (平成 31 年)	
津和野町郷土館	1,877	1,610	2,096	3,150	
津和野町民俗資料館	5,672	3,337	-	-	平成 28 年休館、同 31 年閉館
森鷗外記念館	21,559	12,901	10,573	11,313	
津和野城跡観光リフト	14,406	16,306	15,791	17,401	
桑原史成写真美術館	858	1,324	838	931	
太鼓谷稲成神社	699,772	541,486	554,814	603,983	
安野光雅美術館	22,256	16,593	13,218	12,982	
道の駅津和野温泉なごみの里	260,308	204,240	227,163	244,497	
日原天文台(星と森の科学館含む)	2,289	1,705	2,064	1,274	
枕瀬山森林公園キャンプ場	327	214	216	196	
高津川・鮎つり	25,709	10,250	12,447	12,191	
シルク染め織り館	444	-	-	-	
道の駅シルクウェイにちはら	325,159	306,732	237,117	232,663	
その他(安蔵寺山、杣の里 他)	1,546	2,345	878	97	
森鷗外旧宅	-	16,291	15,217	17,594	
SL 山口号	-	10,378	12,504	16,586	
石見の夜神楽公演	-	683	713	698	
日本遺産センター	-	-	17,101	15,842	平成 27 年 10 月開館
堀庭園	-	-	8,907	10,539	平成 30 年から新規調査
旧畑迫病院	-	-	3,081	2,794	平成 28 年 11 月開館
藩校養老館				6,057	平成 31 年 4 月開館
津和野町 合計	1,382,182	1,146,395	1,134,738	1,210,788	

資料：島根県観光動態調査結果



津和野町日本遺産センター

文化庁により認定された日本遺産「津和野今昔～百景図を歩く～」のストーリーを、映像やパネル展示などで解説し、津和野町の旅をより興味深く楽しんでいただくためのガイドダンスセンター

第4節 歴史環境

1 歴史概況（通史）

（1）原始・古代

津和野町においては、これまでの発掘調査等によって多くの遺跡が確認され、そのうち最も古いのは後期旧石器時代の可能性がある石器が出土している喜時雨遺跡である。

縄文時代の遺跡としては、早期の山崎遺跡をはじめ、後晩期を中心とした高田遺跡や大蔭遺跡などがある。これらのうち、山崎遺跡からは縄文時代早期の土器・石器、高田遺跡からは縄文時代後晩期の土器・石器や管玉、大蔭遺跡からは縄文時代後晩期の住居跡や土器・石器が、それぞれ出土している。

弥生時代の遺跡としては、横瀬遺跡、高田遺跡、大蔭遺跡などがあり、そのうち高田遺跡、大蔭遺跡は縄文時代から継続した時代の遺跡である。

古墳時代の遺跡としては、狐尾遺跡、中原遺跡などが確認されている。また、古墳としては、鍛冶原古墳群、社地脇古墳の2箇所が確認されているのみである。そのため、古墳時代については分からない点が多く、今後、調査・研究が求められる。

大化2年(646)に発布された詔による一連の改革(大化の改新)によって行政機構が整備され、大宝元年(701)の大宝律令制定により古代国家は完成をみた。この時期、国郡里(のち郷)制により、津和野地方(旧津和野町、旧日原町)の開発も進み、「能濃郷」となった。承和10年(843)、吉賀郷とともに美濃郡より独立し、石見国鹿足(『延喜式』に記す鹿足、『和名類聚鈔』では鹿足、加之阿之)郡「能濃郷」となった。

奈良・平安時代の遺跡としては、大蔭遺跡、大婦ヶ遺跡、野広遺跡、直地遺跡などがある。この時代についても古墳時代と同様に確認されている遺跡は少ないが、町の北西側の木部地区にある大婦ヶ遺跡からは、腰帯金具の銅銚、木簡、墨書土器が出土していることから、この時代の官衙の跡であったと推定される。

（2）中世

■吉見時代(1282~1600 14代319年)

中世の初めの津和野地方には、すでに地頭代を務める左兵衛尉がいたが、本格的に開けたのは、元の再々来襲が予測され、山陰沿岸防備のため関東武士の吉見頼行が能登より当地に下り木曾野に館をかまえた弘安5年(1282)以降のことである。



大蔭遺跡（縄文時代の住居跡）



高田遺跡出土遺物（縄文時代）



高田遺跡出土遺物（縄文時代）



大婦ヶ遺跡（奈良・平安時代）

吉見氏は、永仁3年(1295)に津和野^{れいきさん}靈龜山(367m)の南方の尾根を削平して、中^{なか}荒城を築き、これをさらに拡張して靈龜山頂を本丸とし、2代頼直の代まで約30年をかけて一本松城(のちの三本松城、津和野城)を完成させた。

吉見氏11代吉見正頼は、中国地方の有力守護大名大内義隆の姉であった大宮姫を正室として迎えた。義隆は家臣陶晴賢の謀叛により自死し、義兄の吉見正頼は陶氏に三本松城を攻められた。これが天文の役である。城山の全山88箇所^{まさとり}に掘られた堅堀・堀切の空壕と正頼の指揮により、吉見方は104日間の籠城に耐え最終的に講和した。

重要無形民俗文化財に指定された弥栄神社の疫病除けの祭りである「鷺舞」^{さぎまい}は、祇園会に奉納される舞楽で夏の津和野町の風物詩でもあり、京都から山口を経て正頼の時代に始まったものである。

この時代(16世紀)の津和野城の大手は城の西側の喜時雨にあったと伝えられ、その一帯には吉見氏の居館や中世城下町も存在していたものと推定される。その後、16世紀末には、大手、居館、城下町がそれぞれ東側に移っていったと考えられる。



津和野城跡(国史跡)の中世山城の堀切



津和野弥栄神社の鷺舞(国重要無形民俗文化財)



図1-10 歴史概況に関わる主要な文化財と地名

このような吉見氏の時代も、17世紀を迎えるにあたって終わりを告げた。慶長5年(1600)、西軍の総大将であった毛利氏の重臣吉見氏は関ヶ原の戦いに敗れ、毛利氏とともに萩へ退転した。吉見氏の治世は14代、319年間に及んだ。

(3) 近世

■関ヶ原の戦いの直後

領地は一時幕府の直轄地として大森銀山奉行の支配を受けた。直接、津和野城及び城下を預かったのは、吉見氏の遺臣で土着した堀平吉であった。この後、幕府は津和野地方のうち日原・中木屋・石ヶ谷・十王堂・畑ヶ迫の五か所村(間歩口村)を直轄地とし、大森銀山領の代官の支配下においた。幕末(嘉永4年(1851))以降、代官は鉾山師の堀藤十郎を五か所取締役とした。

■坂崎時代(1601~1616 1代16年)

慶長6年(1601)10月頃、坂崎出羽守成正(直盛)が備前富山城主から3万石の津和野城(三本松城)主として入城した。坂崎氏は、城の出丸として織部丸を石垣で築いた。城の土居を石垣に変え、城の強化を図ったのであった。城下町の整備にも力を尽し、大火の多い町中に防火用水のための側溝を掘りめぐらした。



津和野城跡(国史跡)

成正は元和元年(1615)、大坂夏の陣で城を落ちのびる途中の豊臣秀頼の正室千姫を実父であった徳川家康の陣まで護送した。家康より千姫再嫁の仲介を頼まれたが、千姫は拒否し、間もなく本多忠刻への再嫁が決まった。面目をつぶされた成正は、千姫の輿を奪わんとして江戸の屋敷に籠もったが、幕府大目付で親友の柳生宗矩の諫めにより自死した。坂崎の治政はわずか16年間であったが、名主に澄川与助を抜擢し、豊後より楮苗5万本を購入して移植させた。苗の活着の成果はすぐには成就をみなかったが、次の代の津和野藩の経済を支える基礎をつくった功労者となった。

坂崎氏は、津和野藩へお預けとなっていた元横手城主(出羽国仙北)の小野寺遠江守義道に養女を与えるなど、政略家であるとともに温情の人でもあった。町では50年毎に墓のある曹洞宗永明寺で法会を営んでいる。最近では平成17年(2005)に行われた。

■亀井時代(1617~1871 11代255年)

この後、元和3年(1617)に新たに因州(鳥取、鹿野町)鹿野城主であった亀井氏2代政矩が津和野藩4万3千石の城主として入城した。さらに坂崎氏が築いた城や城下を整備した。亀井氏初代新十郎茲矩は鹿野に没したが、山陰地方を拠点として九州の諸大名に互して東南アジアとの朱印船貿易に活躍した。領内の河川治水などの土木工事及び鉾山開発において名を残している。津和野藩の行財政は、津和野亀井氏初代政矩(生年不詳



石見国津和野城下絵図(正保年間)

～1619) (治政3年)、2代 茲政 (1617～1680) (治政62年)、3代 茲親 (1669～1731) (治政51年) の代のはじめまでに概ね確立した。3代にわたる藩主を執政として補佐したのが、家老多胡真清、その次男の主水真益、三男の主水真武、四男の外記真蔭である。特に真益は領民総動員の開墾事業により青野山麓の急斜地を開墾し、耕して天に至る情景は「主水畑」と呼ばれた。真益は他に沼原の7町3反の干拓事業、高津蟠竜湖の20町歩の干拓事業を完遂した。

■石見半紙の生産で15万石の収益

津和野藩は、農民の借銀・借米を帳消しにしたほか、製紙業にも力を入れ、坂崎氏が試みた楮苗の植え付けを定着させた。万治元年(1658)には大坂における半紙の売払高が6千18丸に上り、奉書紙、杉原紙など文書に用いられる高級紙などその品質の良さから大坂市場では「石州半紙(石見半紙)」として評価を高めた。真益の殖産興業の実績は広く全国的に知られ、江戸中期の儒者で現実に即した経世論を説いた太宰春台は、「津和野侯ノ大夫ガ多胡子半紙ヲ造リ、国ヲ富シタルガ如キ、地力ヲ尽セリト云フベキモノナリ」(『経済録』)、「石州ノ津和野侯ハ四万石ノ禄ナルガ板紙ヲ造出シテ、是ヲ占テ売ル故ニ、十五万石ノ禄ニ比ス」(『経済録拾遺』)と記して真益の政策を激賞した。

3代茲親のとき家老多胡真武(主水)が、藩の蓄財を銀2,400石47貫、米5,358石にまで拡大させた。儒学者の荻生徂徠は、その著『政談』において「亀井隠岐守(茲親)ガ家老(真武)ノ料簡ニテ石見ニ木ノ曲リ多キヲ考ヘ、鞍打(鞍作の職人)ヲ招ヨセ、鞍ヲ打セ、夫ヨリ津和野ヨリ鞍出来ル。隠岐守諸方ヘ音信ニモ之ヲ用フ」と述べ、真武が一木一草もおろそかにせず殖産興業に力を尽したことを讃えている。

藩財政の余剰金は幕府の知るところとなったのか、禁裏(御所)の造営を命ぜられたのをはじめ、江戸西郊の中野村にあった犬小屋の普請手伝、勅使などの接待役を勤めることは実に9回にも及び、門番・火防役の公役も含めて津和野藩は出費を強いられた。費用の主なもの、江戸中野村の犬小屋の建築費用(42,400両)、禁裏造営手伝費用(35,840両2分)であった。

「仮名手本忠臣蔵」、「多胡主水伝」、「石見物語」などによると、以下のように伝えられている。元禄11年(1698)、亀井茲親は伝奏役の勤めの際に、高家吉良上野介より侮蔑的な扱いを受け、吉良を討つと激怒した。この間の事情を察した家老の多胡真蔭は一両日待つてほしいと主君に告げ、絹織物、異国の陶磁器、菓子(源氏巻ともいう)に500両の黄金金貨を添えて吉良邸へと赴き、「藩主は田舎育ちで作法もよく存ぜぬため、よろしくお引き回しいただきたい」と伝えた。これにより、翌日以降の上野介の態度は一変し事なきを得たという。

■藩校「養老館」創設

8代亀井矩賢のとき藩校創設が決せられ、天明5年(1785)に大坂より山口剛斎(本名は景德、号は剛斎)が学頭として招聘された。剛斎は闇斎学派の朱子学者で、書・禅・神道・兵学にも通じていた。彼の交友関係には、性理学(哲学)に通じた久米訂斎、国学にも通じた寛政の三博士のひとりである柴野栗山、儒学・国学・神道に通じた服部南郭らがいる。このような学者の影響の下で、万学に通じた剛斎の視野の広い学風は形成され、その後の藩校の校風に少なからず影響を与えた。矩賢は『孟子』の「梁恵王上」に因んで藩校の校名を「養老館」とし、翌天明6年(1786)に津和野城下の中島北端に校舎を建てた。

養老館で教える儒学は官学の朱子学が中心であった。数学教育にも特色があり、藩士の堀田仁助は後に



津和野藩校養老館(県史跡)

幕府天文方に属し、伊能忠敬に先んじて北海道全道の基本地図を作成した。津和野藩の家塾で門下生に数学測量術を教授した。その門下の木村俊左衛門は、藩校の数学・測量術の教授となり、桑本才次郎を育てた。才次郎は養老館数学科の教授となり、自著の養老館出版『尖円豁通』(微積分)をテキストとして教鞭をとった。『尖円豁通』の付録には、パリ大学の懸賞問題と同じ問題が7年も早く掲載されていた。

■権力の正統性を伝統的権威に求め近代日本民族の結集をはかる

11 代亀井茲監は養老館の改革を行い、嘉永2年(1849)に国学者岡熊臣を国学教授に抜擢し、国学を養老館の中心教学とするとともに藩校の学則も制定させた。学則には「道は、天皇の天下を治め給う大道にして開闢以来地に墮ちず」と定め、法でも英雄でもなく神武以来の皇統に日本の国家権力の正統性をもたせた。茲監は、欧米列強のアジア植民地化・半植民地化の波が日本に押し寄せている折から、日本の民族の近代化と結束の理論を国学と伝統的権威である神権的天皇制に求めた。同年、西洋医学科も設置し、『西学入門』(吉木蘭斎著、養老館出版)、ベルリン大学のフーフェラントの『内治全書』を用いるなど、医学を志す藩外の留学生も受け入れた。



亀井茲監公

茲監は、欧米列強の日本進出の脅威を前に、民族の結集をもとめ、朝廷・幕府へ意見書を上申した。特に茲監は情報網を強化し、三日にあけず全国各地から飛脚・早馬によって1通の全長が5mにも及ぶ報告書を送らせた。幕長戦争(長州征討 1864-1865)のおりには、内乱は避けるべしとして情報分析を確実に行ったほか、藩主の強いリーダーシップと国学者福羽美静らの外交交渉により、ついに一発の弾丸も撃たれることなく戦火が避けられた。

なお、「王政復古」の大王令は、養老館国学教授に復帰していた大国隆正の理論『神祇官本義』をもとに、隆正の門下生の玉松操が草稿を書いたものである。明治初年の政体・二官八省のうち、神祇官副知事(次官)には藩主の亀井茲監、神祇官判事には国学者の福羽美静が、書記には加部巖夫がそれぞれ就任し、神祇官の中樞を津和野藩が占めた。

■銅山やたたら製鉄等の産業と暮らし

江戸時代には、銅鉾山を有する日原地区や畑迫地区など五か所村は幕府直轄地となり、銅生産に伴って多くの人々がその一帯で働き、暮らしていた。日原銅山は藤井氏・三好氏、笹ヶ谷鉾山は堀氏などの銅山師によって経営されていた。特に畑ヶ迫村(現、津和野町邑輝)に居住したと伝えられる堀氏は、近世から近代にかけて、邸宅や庭園を整備し、鉾山労働者等の福利厚生・教育などに地域経営的な視点を持って取り組んでいた。



笹ヶ谷鉾山跡

また、青原庄屋であった原田氏は、高津川流域における豊富な水と森林資源(薪炭材)を利用して、たたら製鉄を行っていた。特に左鐙地区で盛んに行われており、多くのたたら場の跡が残されている。

■津和野藩領と街道・往還道

近世における津和野藩領は、現在の津和野町・吉賀町のほぼ全域に加え、益田市・浜田市・邑南町域内にも存在した。

また、津和野藩領に囲まれる形で幕府領(天領)が日原及び畑迫などに存在した。

これら領内を通る主要な道としては、日本海沿岸部と山口方面をつなぐ山陰道、中国山地の藩領をつなぐ津和野奥筋往還、中国山地を越え瀬戸内海沿岸部へとつながる津和野廿日市街道があった。特に津和野廿日市街道は、津和野藩主の参勤交代で利用され、廿日市には津和野藩の御船屋敷が置かれた。



図 1-11 津和野藩領と街道・往還道

※「津和野藩ものがたり」(山陰中央新報社)の図を参考に作図

(4) 近現代

■宗教行政の中枢に津和野藩

明治新政府は、津和野藩出身の前記の人々を中心に、神道国教化政策を推進し、徳川幕府に継いでキリシタンを禁令とした。その背景にはキリスト教が孤児の収容や施薬院の設置など信仰とともに民衆の心をつかむ一方、キリスト教国が強力な軍事力により植民地化をはかるなどアヘン戦争と同じ撤を踏むことを恐れたという理由もあった。

明治元年(1868)から同2年にかけて、長崎浦上のキリスト教徒は検挙され、名古屋以西の10万石以上の諸藩へ配流となった。4万3千石の津和野藩は、例外的に配流になる藩の対象となった。高松・松山その他の各藩が100名以下の配流人数であったのに対して、津和野藩は153名の配流となった。津和野藩主や津和野藩の国学者らが神祇官の中枢を占め、神道国教化の推進的立場にあったからである。改宗の強要に伴う拷問により、37名もの殉教者を出した場所である旧光琳寺跡には「乙女峠マリア記念堂」が建ち、今日では国際的に著名な場所になっており、殉教者の列聖列福運動が進んでいる。

明治天皇即位式は、政府から任命された津和野藩主の亀井茲監や藩の国学者らが、それまでの中国風の様式を廃し、日本の古典を考証して制定した純日本式の新式にて举行された。



乙女峠マリア記念堂

■ 斯界の先哲を輩出

養老館儒学科教官であった西周は「永の暇」をもらい、やがてオランダへと留学した。帰国後には、国際法「万国公法」の翻訳に携わったほか、将軍徳川慶喜のブレーンとして「議題草案」を執筆し、二院制の確立を答申した。維新後、西周は沼津兵学校（徳川家兵学校）頭取（校長）となり、やがて新政府と徳川家の命により兵部省に出仕、軍人のモラルの確立や軍事制度・諸規則の制定に携る一方、哲学による万学の統一を説いた『百一新論』『百学連環』などの著書や私塾での講義により西洋哲学を紹介するとともに、独自の近代的哲学体系の確立を試みた。西周は明六社にも所属して機関紙『明六雑誌』に多くの論文を発表し、日本人の精神の近代化を啓発した。このことにより、西周は日本近代哲学の祖とされる。



西周旧居（国史跡）

津和野藩の奨学制度である「貢進生制度」によって大学南校（現・東大理学部）に進んだ養老館出身の小藤文次郎は、日本地質学の祖とされ、彼の地震説と濃尾大地震の根尾谷断層写真は世界の教科書にも紹介された。平成7年（1995）の阪神・淡路大震災に係る北淡震災記念公園（兵庫県淡路市）では、今日でも小藤の写真とともに根尾谷断層の写真や地震説がパネルにより紹介されている。

同じく養老館に学んだ山辺丈夫は、西周の私塾やイギリスに学んだ後、日本近代化の要請を受けてイギリスに渡り、紡績業を一職工からのたたきあげで学び取った人物である。帰国後には大阪紡績を興し、社長に就任した後は、それまで輸入が7割を占めていた織物製品を逆に7割を輸出するまでに成長させた。そのような業績により、山辺はわが国近代紡績業の父と呼ばれている。

■ 全国諸藩に先がけ版籍奉還

日本が強大な中央集権国家として対外政策に当ることを目的として、津和野藩は全国諸藩に先がけて版籍を奉還し、浜田県に合併したため、養老館も廃校となった。養老館の出身者には、前記の人物のほか、北海道帝国大学総長高岡熊雄、島根県出身者ではじめて島根県知事となった高岡直吉らがいた。

文豪森鷗外は養老館最後の在校生で、通学した2年間は学年一番の優等生として賞を得ている。森鷗外は、『キタ・セクスアリス』、『サフラン』、『なかじきり』、『本家・分家』など、10歳までを過ごした津和野の情景や思い出を作品に多く書き残している。文学博士及び軍医総監として大成したのみならず、近代日本の文豪として名を残した。森鷗外は、津和野奨学会理事長として後進の育成にも尽力した。



森鷗外旧宅（国史跡）

■ 行政の変遷

明治4年（1871）6月、廃藩により津和野は浜田県に合併された。浜田県では津和野出張所を置き、大野直世・新井宜哉等を官属掛として事務処理にあたらせた。翌明治5年（1872）には県出張所を廃止し、鹿足郡役所を津和野に置いた。後に部区制を敷いた結果、鹿足郡は第五大区となり、明治7年（1874）に養老館跡地に役所が置かれた（現在の津和野町役場津和野庁舎は大

正 8 年(1919)築の郡役所)。その後、郡制は大正 15 年(1926)まで続き、郡役所は郡内 1 町 11 村の行政指導及び地域開発の拠点として機能した。津和野地区には、明治 6 年(1873)に警察署が設置されたのをはじめ、その後も明治 21 年(1888)に登記所が、明治 29 年(1896)に第二土木管区員分派所(土木事務所の前身)が、そして明治 35 年(1902)に税務署がそれぞれ設置されるなど、主要な官庁が次々と開設された。

明治 7 年(1874)には無用となった旧津和野城の建物が解体され、町内の商人に払い下げられた。藩邸の建物の一部は浜田へ移設された。また、藩邸の瓦や板戸についても町民が買い受けるなどして、今日商家などで保存されている。

明治 21 年(1888)には市町村制が公布され、翌明治 22 年(1889)4 月から実施された。津和野地域においては津和野町・畑迫村・木部村・小川村が誕生し、日原地域においては、日原村・青原村・須川村が誕生した。その後、昭和 10 年(1935)に日原村と須川村は合併し、昭和 21 年(1946)に日原町となった。さらに昭和 29 年(1954)には青原村が日原町に合併し、昭和 30 年(1955)には津和野地域の 3 村が津和野町に合併し、平成 17 年(2005)には平成の大合併により津和野町と日原町が合併し、現在の津和野町が誕生した。

■教育の発展

明治 41 年(1908)7 月、旧養老館を利用して郡立の女学校が開校した。大正 4 年(1915)には新校舎が養老館の敷地内に完成し、大正 11 年(1922)には県立の高等女学校となった。また、大正 14 年(1925)には待望であった県立中学校の建設が着手された。建設費のおよそ 16 万 8 千円のうち亀井家が 6 万円、堀家が 2 万円を支出したほか、町民などからも多額の寄付が寄せられたとされ、教育に対する意識の高さを感じさせる。藩校養老館の廃止後、ようやく津和野町に中等教育を受ける体制が整い、町民は大いに喜んだという。これらの 2 校は昭和 24 年(1949)4 月に統合し、現在の県立津和野高等学校となっている。

その他の教育文化施設としては、大正 10 年(1921)に津和野町郷土館が藩校養老館御書物蔵を利用して開館しており、国内で最も古い地方の公立博物館であった。

一方で、殿町東側の水路には現在も鯉が泳いでいるが、これは民俗学者宮本常一の提案により、昭和 9 年(1934)に商家の旦那衆の集まり「花草会」によって放されたものである。津和野幼稚園に通う子どもたちを喜ばせようという当時の人々の発想であったが、それが今日の津和野町の観光に大いに寄与している。



津和野町役場 (旧鹿足郡役所) (国登録)



殿町の水路の鯉



JR 山口線 SL 号

■交通機関の発達

交通関係では、大正 11 年(1922) 8 月、津和野～徳佐間の鉄道敷設工事がようやく完了し、待望の鉄道が津和野町まで開通した。物産共進会や教育品展覧会など様々な祝賀行事が開催され、町民の喜びも非常に大きいものであったと思われる。翌大正 12 年(1923)には津和野～益田間が開通するとともに、山陰本線も益田までが開通した。これによって物資の異動や人々の活動範囲も拡大し、津和野町の生活も大きく変化した。

自動車等の普及により昭和 35 年(1960)から建設が開始された国道 9 号のバイパスは、昭和 40 年(1965)に開通した。江戸時代以来、町の中心を通過していた山陰道は県道となったが、バイパスの完成によって津和野町の街並みは保存されてきたといっても過言ではない。

■産業の発展

産業の基盤である金融については、明治 12 年(1879)に石見一円を対象とした国立第五十三銀行が津和野に設立されるなど早くから整備が進んだ。

高津川流域は豊かな森林と水に恵まれ、江戸時代にはたたらたたらの生産や「木地屋」と呼ばれる人々による指物・漆器などの生産が盛んであった。明治期になると山林の一部が国有化され、明治 42 年(1909)に枕瀬地区まくらせに開設された広島大林区日原製材所を拠点として、大量の木材が産出されるようになった。

江戸時代から盛んであった和紙の生産については、明治 32 年(1899)に製紙伝習所が設けられ、その技術の向上が図られた。大正 5 年(1916)には津和野町改良紙購販生組合が設立され、大正 7 年(1918)には現在の石見製紙株式会社が発足した。

また、この地域では昔から養蚕が盛んで農家で生糸の生産が行われていた。明治期に入り、絹工業の発展をめざして機業伝習所が設けられ、技術の向上が図られた。明治 42 年(1909)には津和野町に田中機業株式会社が設立、昭和 4 年(1929)には日原地区にちはらに石西社せきせいしやが設立され製糸業が本格的に始まった。

農村医療の充実を図ろうと青原産業組合あおはらが全国に先駆けて大正 8 年(1919)に青原組合医院を設立し、昭和 6 年(1931)には石西利用組合せきせい共存病院が設立され、今日の公営の病院へとその意思が引き継がれている。

中世以降続く畑迫地区はたがさこや日原地区の銅山では、明治期に入り火薬による発掘法がもたらされ、銅の産出量が飛躍的に増加した。さらに洋式の溶鉱炉や蒸気原動力による送風機・捲揚機などの導入により作業の効率化も図られた。明治 25 年(1892)には島根県内でもいち早く発電を行い、工場内だけでなく民家にも配電を行った。大正期に入り第 1 次世界大戦の特需で銅の産出量も増大した。しかし、その後は海外からの銅の輸入も増えて日本の鉱業界は不況となり、笹谷ささがつたに鉱山を除く鉱山の整理が行われ、笹谷鉱山も昭和 24 年(1949)には廃山となった。

■高津川流域での生業

津和野町の町域すべてが高津川たかつがわの水系にあたり、古くから高津川の恵みを受けつつ、ときには洪水等に立ち向かい、人々は暮らしと生業を営んできた。

主な生業は、アユなどの川漁と高津川清流、ワサビ生産、稲作と棚田、木材生産及び狩猟と森の景観、茶畑などがある。



アユ漁

川漁についてみると、高津川清流がもたらす環境は、多様な生物を育み、アユ、モクズガニ（別名ツガニ）などは、古くから特産物となっている。特に高津川のアユは、香魚の名にふさわしい香りと味を備え、全国的に名声を得ており、アユ漁も盛んに行われ夏の風物詩でもある。

木材生産についてみると、津和野町（旧日原町）には、かつて日原営林署が置かれ、多くの就労者が働き、木材を生産してきた。営林署が置かれるだけの森林資源があり、その昔は高津川を利用して木材を下流部に移動させていた。また、豊富な木材を利用して木炭の生産も盛んに行われていた。現在も森林組合をはじめ製材を主とした産業が残っている。

また、津和野町は古くから茶の産地である。昼と夜の寒暖の差が大きく、朝霧に包まれる環境は上質なチャノキの育成に適している。高津川水系である津和野川沿いの地形を生かして緑茶の茶畑が広がる。特徴的な茶としてカワラケツメイという自生種を茎ごと炒ってつくる「ざら茶（まめ茶）」は、地域の特産品として広く愛飲されている。

■観光の振興

昭和 40 年代に入ると国民宿舎「あおのさんそう青野山荘」や国民保養センター「つわの荘」が開設され、城山山頂への中国自然歩道やリフトの新設、藩校養老館や西周旧居など歴史文化遺産の修理が行われるなど、観光振興へむけた取組が進められた。

昭和 50 年代に入ると国鉄のキャンペーンやテレビ、雑誌などで津和野の町が紹介され、観光客が年間約 150 万人へと増加した。さらに山口線の S L 復活や殿町通りの整備など、今日の観光の基礎が築かれた。

平成に入ると、津和野川の津和野大橋周辺の河川工事や殿町通りから本町通りにかけての道路の美装化（石畳）や道の駅の建設などの大規模事業が行われたほか、森鷗外記念館、あんのみつまさ安野光雅美術館などの文化施設の整備・充実に取り組んできた。

<出典・参考>

- 津和野町史 第 4 卷（平成 17 年 3 月）（松島弘氏執筆）
- 史跡津和野城跡保存管理計画（平成 24 年 3 月）：第 2 章「3 津和野町の歴史」（松島弘氏執筆）
- 津和野町歴史的風致維持向上計画（平成 25 年 4 月）：第 1 章「第 5 節 歴史的環境」



ワサビ田



茶畑



森鷗外記念館

2 津和野町の沿革

津和野町の町域は、明治4年(1871)の廃藩置県によって浜田県（のちに島根県）に属し、明治12年(1879)には現在の津和野藩校養老館の場所に鹿足郡役所が設置され、大正8年(1919)に現在の津和野町役場津和野庁舎となる建物に新築移転し、郡の行政、経済の中心として発展した。

旧津和野町の沿革については、明治22年(1889)の市町村制施行により鹿足郡津和野町が発足、昭和30年(1955)に津和野町、小川村の一部、畑迫村、木部村の近隣四町村が合併し、(新)津和野町となった。

旧日原町の沿革については、明治22年(1889)の市町村制施行により鹿足郡日原村が発足、昭和10年(1935)に鹿足郡須川村を編入、昭和21年(1946)に町制を施行、昭和29年(1954)に青原村と合併し、(新)日原町が発足、さらに昭和30年(1955)に鹿足郡小川村の一部を編入した。

現在の津和野町は、平成17年(2005)9月25日、旧津和野町と旧日原町が合併して誕生した。

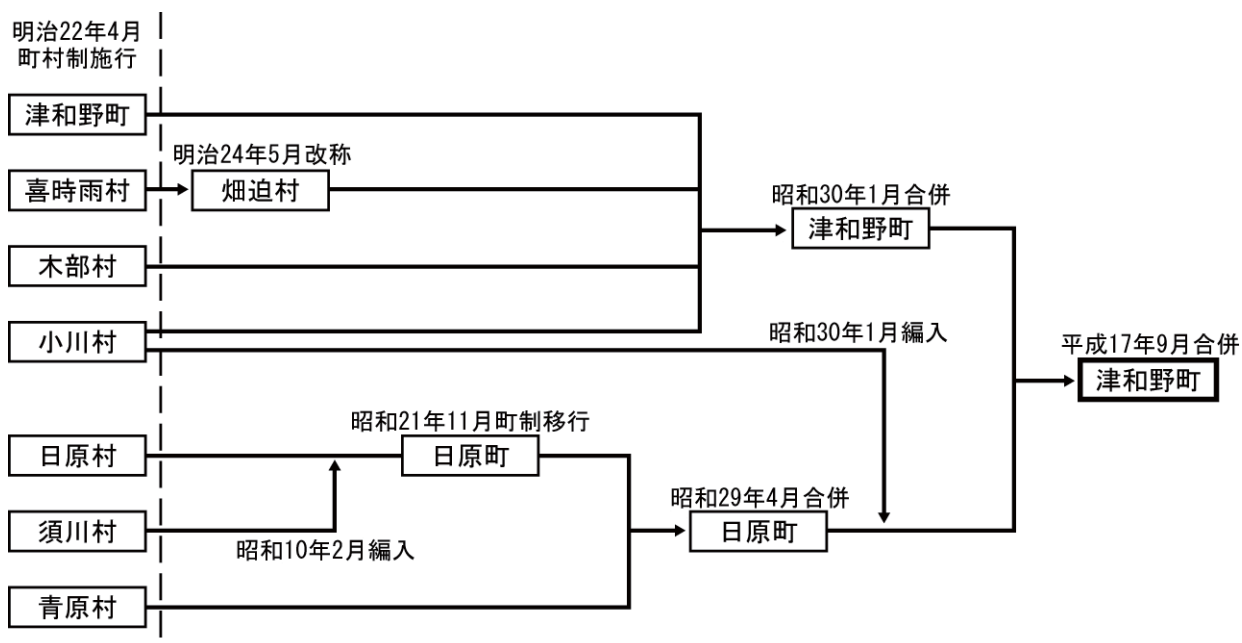


図 1-12 津和野町の沿革

3 災害履歴

■水害

津和野町は平地部が少なく大半が山地部であり、そこに高津川やその支流が多数流れており、幾度となく河川の氾濫や豪雨による崖崩れなどの災害が発生している。

江戸時代から明治・大正時代の文献・史料には、(旧)城下町での床上浸水、津和野大橋の流失などが記されており、発掘調査においては氾濫の痕跡と考えられる地層も確認されている。

昭和時代以降においても、高津川やその支流の氾濫、土石流などにより度々甚大な被害が発生している。

近年においては平成 25 年(2013) 7 月、町内観測史上最大の豪雨(降水量)があり、土石流が発生し、^{わしぼら}驚原から^{なよし}名賀一帯(一級河川高津川水系津和野川、名賀川)において、行方不明者 1 人のほか、家屋の流出、倒壊、床上浸水、道路決壊、IR 山口線の線路流出などの被害が発生した。

■地震

津和野町における記録されている地震で、最大の震度は平成 9 年(1997)に発生した山口県北部地震で、本町の震度は記録されていないが、震源地からの距離が本町より遠い益田市で震度 5 強であったことから、それと同程度の震度であったと考えられる。この地震により、津和野城跡の石垣の一部が崩落している。

気象庁「震度データベース」では、津和野町として検索できる平成 14 年(2002)以降においては、震度 3 以上の地震(最大は震度 4)が 6 件発生している。

■火災

最近 10 年間(平成 22 年～令和元年)の火災発生件数は、年間平均で 6 件弱となっている。各年の火災発生件数は、津和野地域が日原地域よりも上回る年がやや多いが、令和元年(2019)は日原地域 6 件、津和野地域 1 件となっている。

歴史的にみると、江戸時代の初期、寛永 2 年(1625)に城下のおよそ 900 棟を焼失、宝永 2 年(1705)にも 900 棟を焼失し、翌・宝永 3 年に津和野川に堰を設け、城下に幹線水路を整備した。その後も、宝暦 13 年(1763)、安永 2 年(1773)にそれぞれ 1,000 棟を焼失し、さらに、嘉永 6 年(1853)には城下最大の火災が発生し、津和野藩邸を含む 1,760 棟が焼失し、死者 25 人を数えることとなった。

こうした旧城下町の災害履歴や市街地の特性(伝統的建造物、木造、密集)を踏まえ、津和野町では重要伝統的建造物群保存地区における防災計画を、平成 30 年(2018) 3 月に策定した。その策定過程では、住民による防災訓練(水路の活用によるバケツリレー、減圧弁による消火栓の利用等)やワークショップを行っている。



水路の水を利用したバケツリレー



消火栓利用(減圧弁)の放水訓練